

群 教 セ	G12 - 01
	平23.243集

自分の成長を実感する児童を育てる 生活科指導

— 「モデルを提示して活動を促す支援」と
「手掛かりと視点を取り入れた振り返り」を通して —

長期研修員 高橋 純代

《研究の概要》

本研究は、「モデルを提示して活動を促す支援」と「手掛かりと視点を取り入れた振り返り」を手だてとして、自分の成長を実感する児童を育てることを目指したものである。生活科の単元を、内容(9)「自分の成長」と関連付けて単元構成をし、児童が対象とかかわる意欲をもち、活動の充実感を味わい、自分の取組の達成感を味わえるようにすることで、単元の終末で自分の成長を実感することができるようにした。

キーワード 【生活科 自分の成長 意欲 充実感 達成感 振り返り】

I 主題設定の理由

今日の社会の急速な変化は、子どもたちの生活様式や価値観に大きな影響を及ぼしている。経済や社会の変化が激しく未来が不確定な現代は、学ぶことに価値を見いだしづらい状況にあり、学習意欲の減退だけでなく、成長の糧となる様々な試行錯誤に取り組もうとする意欲そのものの減退も懸念されている。学校教育において、次代を担う子どもたちが成長する意欲をもち、生き生きと充実した生活を送れるようにすることは、子どもたちに我が国の未来への希望を託すために極めて重要な課題である。

平成20年の中央教育審議会の答申では、生活科の改善の基本方針について、「(前略)人や社会、自然とかかわる活動を充実し、自分自身についての理解などを深めるよう改善を図る」と提言された。これを受けて、小学校学習指導要領解説生活編では、自分自身に関する目標が、学年の目標(3)「身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気づき、意欲と自信をもって生活することができるようにする」と新たに掲げられた。そして、生活科の内容(9)「自分の成長」は、「内容(1)～(8)のすべての内容と関連させて単元を構成すること」ができると示された。このことから、これまでの生活科の単元構成の在り方を見直す必要があると考えた。

これまでの生活科の単元構成では、対象への気づきの質を高めることを中心に学習指導が進められてきた。児童が楽しんで取り組めるような活動や体験の充実、活動や体験を振り返って表現できるような指導の工夫などの取組も数多く実践されてきた。このような生活科の単元構成の中で、児童は単元の学習を通して成長することができている。しかし一方では、児童が自分の成長を自覚するにいたっていない場合も見られるのが現状である。

本研究では、自分の成長を実感する児童を育てる生活科指導について研究していく。そこで、生活科の各単元に、内容(9)「自分の成長」を関連付けて単元構成をし、単元の終末で児童が自分の成長を実感することができるようにする。具体的には、単元の「である」過程において対象とかかわる意欲をもち、「はたらきかける」過程で活動の充実感を味わい、「ふりかえる」過程で自分の取組の達成感を味わえるようにする。意欲とは人間が活動するための原動力であり、活動を充実させていくエネルギーになる。対象とかかわる意欲をもち、試行錯誤して自分の思いや願いの実現のために充実した活動を行えば、児童は自分でやり遂げたという達成感を味わうようになる。このような単元構成を組むことにより、単元の終末で、自分の成長を実感する児童を育てることができると考える。

以上のことから、小学校生活科の単元において、「モデルを提示して活動を促す支援」と「手掛かりと視点を取り入れた振り返り」を手だてとすることにより、自分の成長を実感する児童を育てることができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校生活科の単元において、「モデルを提示して活動を促す支援」と「手掛かりと視点を取り入れた振り返り」を手だてとして、児童が対象とかかわる意欲をもち、活動の充実感、自分の取組の達成感を味わえるようにすることにより、自分の成長を実感する児童を育てることができるとを、実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

単元において、以下の手だてにより、対象とかかわる意欲をもち、活動の充実感を味わい、自分の取組の達成感を味わえるようにすれば、児童は、単元の終末で成長を実感するようになるであろう。

- 1 「「である」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、先行経験と対象とを結び付けて考えられるようにすることで、対象とかかわる意欲をもつことができるようになるであろう。
- 2 「はたらきかける」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、「対象」「利用の仕方」「他者とのかかわり」「表現」の視点から工夫を考えられるようにすることで、対象や人とのかかわりを深め、活動の充実感を味わうことができるようになるであろう。
- 3 「ふりかえる」過程において、「学習スタート時の思いや願い」「成果物」「活動の発表における他者からの評価」を振り返りの手掛かりとして提示し、「人とのかかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」の視点から学習全体を振り返れるようにすることで、自分の取組の達成感を味わうことができるようになるであろう。

IV 研究の内容

1 自分の成長を実感する児童を育てるとは

本研究における自分の成長を実感する児童とは、学習で経験して得たことを基に、自分が変容したことを喜び、自分の変容を前向きに受け止める児童である。生活科の指導において、児童が対象とかかわる意欲をもち、活動の充実感を味わい、自分の取組の達成感を味わえるようにすることにより、単元の終末で、自分の成長を実感する児童を育てることができると考える。

まず、「である」過程において、児童が対象とかかわる意欲をもてるようにする。対象に興味・関心を抱き、知識・技能の獲得や目標の達成等へ向かって意欲をもつことは、成長のための原動力となる。この時期の児童は、好奇心のかたまりであり、対象一つ一つに対して、疑問を發し、知ること、發見することを積み重ねて成長していく。その対象と自分との関係を見つめることを通じて、その対象に近づくために何かをしたいという意欲をもつようになる。

次に、「はたらきかける」過程において、児童が活動の充実感を味わえるようにする。低学年の児童にとって、対象とかかわる意欲をもち、生き生きと充実した活動をすることは、成長する上で必要不可欠なことである。活動する中で、対象や人とのかかわりを深めていくにつれて、自分の思いや願いを実現できた喜びを味わうこともあれば、思うとおりに行かず葛藤することも考えられる。ここで、児童が、「教えられる」のではなく、「自分で学ぶ」という感覚や、「自分にもできそうだ」「自分ならこうする」という感覚をもって活動することで、充実感を味わうようになる。

そして、「ふりかえる」過程において、自分の取組の達成感を味わえるようにする。単元のねらいの達成に向けて児童が懸命に活動に取り組んだことを振り返れるようにする。この時期の児童は、時系列で自分の活動を思い出すことが困難な場合もある。ここで重要なことは、時系列で自分の活動を

並べて思い出すことでなく、自分自身に目を向けることができるようにすることである。「自分にもできそうだ」「自分ならこうする」という感覚をもって活動した中で、「自分」がどのように変容してきたかを自覚することができるようにする。このようにして児童は、「自分」でやり遂げたという達成感を味わうようになる。以上のような単元構成を組むことにより、単元の終末で、自分の成長を実感する児童を育てることができると考える。

2 「モデルを提示して活動を促す支援」と「手掛かりと視点を取り入れた振り返り」について

(1) 「モデルを提示して活動を促す支援」とは

本研究で提示する「モデル」とは、児童自身が実際に見たり触れたりすることができ、考えるヒントとなる具体物である。モデルは、児童が「試す」「比べる」「たとえる」ことができるものを条件とする。この三条件のうち、一つだけを満たすものもあれば、二つ、三つの条件を満たすものも考えられる。「活動」とは、児童が見たり触れたりするなどして、操作しながら試行錯誤して考えることをいう。この時期の児童は、具体物を操作しながら考えるという特性をもつ。「モデルを提示して活動を促す支援」とは、教師主導の言葉中心の教え方ではなく、児童自身が具体物を操作して、「自分で学ぶ」という感覚をもてるようにする支援である。

本研究では、「モデルを提示して活動を促す支援」を、「であう」「はたらきかける」の過程における研究上の手だてとする。以下に各過程ごとの手だてを述べる。

① 「であう」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、先行経験と対象とを結び付けて考えられるようにすることについて

生活科の学習対象は、身近な人々、社会、自然であり、これらとのかかわりを通して得たことが、児童の先行経験となり、日々の生活を送る中で経験となって積み重ねられていく。このような先行経験とこれから学習する対象とを結び付けて考えられるようにすれば、児童は学習に対して意欲をもって取り組めるようになる。

「試す」ことができるモデルは、先行経験がある児童も、先行経験がない児童も、同様に試すことができるものである。そのモデルを操作して考えたことが児童同士の共通経験となり、その時点から「先行経験」となる。この時期の児童の先行経験は個人差が大きい。先行経験がない児童にとっては、経験を増やすことができるモデルとなる。「比べる」ことができるモデルは、対象の特徴を比べることができるものである。単元のねらいを基にして、児童に気付いてほしい特徴の類似点や相違点を比べることができるモデルである。「たとえる」ことができるモデルは、児童の既知の物事と結び付けて、「～に似ている」「～みたい」と、たとえることができるものである。既知の物事にたとえることで、対象に対して愛着をもち、かかわる意欲をもつようになると考える。

② 「はたらきかける」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、「対象」「利用の仕方」「他者とのかかわり」「表現」の視点から工夫を考えられるようにすることについて

ここで挙げた「対象」「利用の仕方」「他者とのかかわり」「表現」の四視点は、教師の見取りと支援の視点である。この視点から工夫を考えられるようにすれば、児童は対象や人とのかかわりを深め、活動の充実感を味わうことができるようになる。

例えば、「対象」の視点から支援が必要であると見取った場合、対象の特徴を生かして工夫を考えられるようにすることができるようなモデルを考える。児童の活動の様子から、その児童がまだ対象の特徴に気付いていない段階であれば、「試す」ことができるモデル、対象の特徴に気付いているが活動が停滞している段階であれば、「比べる」ことができるモデル、対象の特徴を生かしてさらに活動を発展させていきたい段階であれば、「たとえる」ことができるモデル、といった具合に、支援の視点とモデルを組み合わせていく。教師は児童の活動を見取り、児童の思いや願いに沿ったモデルを提示する。このように、モデルを提示して活動を促す支援をすることで、児童は、「自分で学ぶ」という感覚をもって、活動の充実感を味わうことができるようになる。と考える。

教師の見取りと支援の四視点について、以下に示す（表1）。

表1 教師の見取りと支援の四視点

視点	視点の内容
「対象」	対象に直接かかわって対象の特徴に気付くという生活科の学び方から、対象の特徴を生かして工夫を考えられるようにするための視点
「利用の仕方」	対象との適切なかかわりができるようにしたり、生活を楽しくしたりすることができるようにするための工夫を考えられるようにするための視点
「他者とのかかわり」	他者とのかかわりや交流などのコミュニケーションを深めることができるようにするための工夫を考えられるようにするための視点
「表現」	相手に分かるように伝えることや、自分の活動から生み出した気付きから工夫を考えられるようにするための視点

(2) 「手掛かりと視点を取り入れた振り返り」とは

本研究における「手掛かりと視点を取り入れた振り返り」とは、低学年の児童が、単元の学習全体における自分自身に目を向けることができる振り返りのことである。低学年の児童は、時間の経過とともに過去のことを忘れてしまう傾向が見られる。本研究のように、単元における児童自身の成長に気付けるようにするためには、単元始めの児童自身を想起できる手掛かりが必要である。手掛かりとしては、「学習スタート時の思いや願い」「成果物」「活動の発表における他者からの評価」を挙げる。しかし、振り返りの手掛かりを提示しただけでは、自分自身のことを振り返って絵や言葉で表現するところまでいたらない場合が多い。絵や言葉で表現することで、児童は表現しながら振り返り、自分自身への気付きを自覚できるようになる。そこで、振り返りの手掛かりと同時に、振り返りの視点を問いかけることが必要である。振り返りの視点としては、「人とのかかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」を挙げる。振り返りの手掛かりと視点について、以下に述べる。

① 「学習スタート時の思いや願い」「成果物」「活動の発表における他者からの評価」を振り返りの手掛かりとして提示することについて

本研究では、児童が単元始めと単元の終末の自分自身を比較することで、自分の成長を実感することができるようにする。「であう」過程では、「学習スタート時の思いや願い」として児童自身が絵や言葉で記録しておくようにする。また、単元の内容によっては、単元始めの児童の活動の様子を教師が写真等で記録しておく。この記録を単元の終末の児童の様子と比較することで、児童は自分の成長が目に見えるようになり、成長を実感することができる。「はたらきかける」過程では、「成果物」を蓄積していく。「成果物」は、児童の成長を物語る重要な手掛かりとなる。そして、対象や人とのかかわりを深めることで、児童は互いの思いを交流して伝え合うようになる。この「活動の発表における他者からの評価」は、児童自身が自覚していない自分の成長を他者によって気付かせてもらうことができる重要な手掛かりになる。以上三点を振り返りの手掛かりとして提示することで、低学年の児童が学習全体における自分の活動を、振り返ることができるようにする。

② 「人とのかかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」の視点から学習全体を振り返れるようにすることについて

上記の振り返りの手掛かりを提示すると同時に、「人とのかかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」の三つの振り返りの視点を問いかけることで、児童が学習全体における自分の活動とともに、学習全体を通してどのように変容することができたか、具体的に振り返ることができるようにする。「人とのかかわり」では、かかわった相手の具体的な名前を挙げるようにする。単元始めの「人とのかかわり」と、単元の終末の「人とのかかわり」を比べてみると、かかわった友達の数が増えたり変化したりすることに気付くことができる。児童によっては、友達の数の方の多さではなく少人数の友達とじっくりかかわることができたことに気付くことができ

る。また、製作の際には人とかかわらず一人で集中して取り組んだが、活動の発表において多くの友達とかかわり賞賛されたことを喜ぶ児童がいることも考えられる。「できるようになったこと」では、振り返りの手掛かりを見ながら、自分自身の力でできるようになったことについて具体的に振り返ることができるようにする。単元始めにはできなかったことが、「自分で」できるようになったことを自覚することができる。「工夫したこと」は、振り返りの手掛かりを見ながら、自分でいろいろ考えて試行錯誤して工夫することができるようになったことについて具体的に振り返ることができるようにする。振り返りの視点について、以下に示す（表2）。

表2 振り返りの視点

振り返りの視点	視点の問いかけ
「人とかかわり」	○低学年の児童が振り返ることができるように、だれとかかわったか、だれとどんなことをしたかといった、具体的な人の名前を挙げられるようにする。 ○かかわった相手から、自分がどのような活動をしたかを聞いて、自分自身を振り返れるようにする。
「できるようになったこと」	○振り返りの手掛かりを見ながら、具体的にどんなところが難しかったか、自分で挑戦してできるようになったことはどこかといったことなどを振り返れるようにする。
「工夫したこと」	○振り返りの手掛かりを見ながら、どこを工夫したのか、自分が試行錯誤して考えたところなどについて具体的に振り返れるようにする。

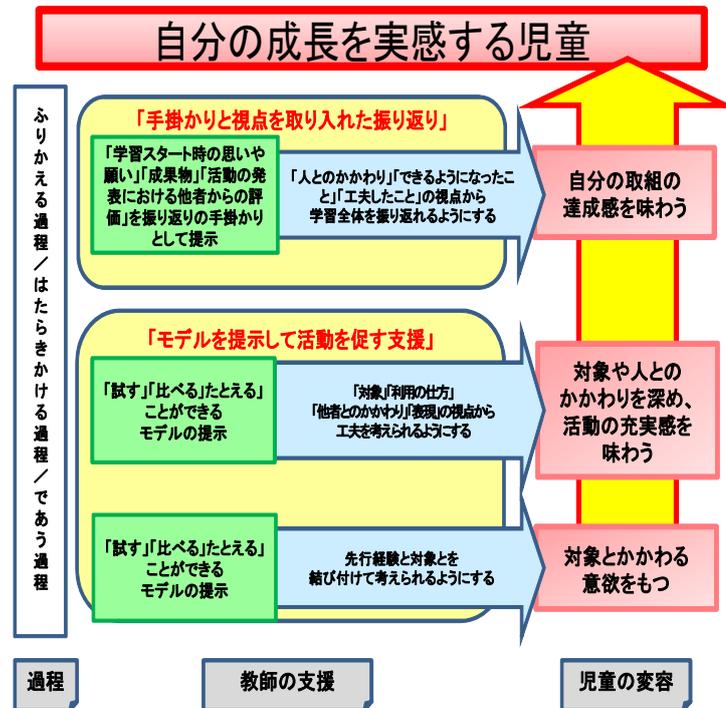


図1 研究構想図

V 研究の計画と方法

1 実施計画

対象	小学校第1学年 1年3組 30名
単元名	「あきのおもちゃ だいしゅうごう」
実施期間	平成23年10月13日～11月7日 10時間
授業者	長期研修員 高橋 純代

2 抽出児童

児童A	校庭で遊ぶことが好きで、非常に活発であるが、自分の気持ちを言葉を使って他に伝えることがあまり得意ではない。自然物を使った遊びに関する先行経験は豊かであり、木の実や草花だけでなく、虫などの生き物にも興味をもっている。
-----	---

3 検証計画

検証計画	検証の観点	検証の方法
見通し1	「である」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、先行経験と対象とを結び付けて考えられるようにすることは、児童が対象とかかわる意欲をもつ上で有効であったか。	○学習活動の観察 ○記録ビデオ ○製作物 ○ふりかえりカード
見通し2	「はたらきかける」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、「対象」「利用の仕方」「他者とかかわり」「表現」の視点から工夫を考えられるようにすることは、児童が対象や人とかかわりを深め、活動の充実感を味わう上で有効であったか。	
見通し3	「ふりかえる」過程において、「学習スタート時の思いや願い」「成果物」「活動の発表における他者からの評価」を振り返りの手掛かりとして提示し、「人とかかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」の視点から学習全体を振り返れるようにすることは、児童が自分の取組の達成感を味わう上で有効であったか。	

4 単元の目標及び評価規準(●自分の成長)

目 標	秋の自然の中で遊んだり、秋の自然物や身近にある物でおもちゃを工夫してつくって遊んだりして、秋の遊びの面白さに気づき、安全に気を付けて、みんなで遊びを楽しむことができる。	
	●自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもちとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活できる。	
評価規準	生活への 関心・意欲・態度	秋の自然の中で遊んだり、秋の自然物や身近にある物でおもちゃをつくらせたりすることに関心をもち、みんなで楽しく遊ぼうとしている。 ●これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとしている。
	活動や体験についての 思考・表現	秋の自然の中で遊んだり、秋の自然物や身近にある物でおもちゃを工夫してつくったりしながら、遊びの約束やルールを考えて、みんなで楽しく遊んでいる。 ●自分の成長に希望をもち、これからの生活について考えている。
	身近な環境や 自分についての気づき	秋の自然の中で遊んだり、秋の自然物や身近にある物を利用しておもちゃをつくらせたりする面白さや、みんなで遊ぶことの楽しさに気付いている。 ●自分自身のよさが分かり、これからも成長できることに気付いている。

指導計画(全10時間予定)

	観 時	主な学習活動	指導上の留意点(●研究上の手だて)
見 通 し 1	で あ う	1 ○校庭と学校周辺の道路、公園への散歩をする。	○チカラシバやススキ、コスモス、メヒシバが生えているコースを散歩することで、児童が草花遊びをすることができるようにする。
		2 ○公園や校庭で秋の自然を使った遊びを考えて遊ぶ。 ○秋の自然を利用した遊びへの意欲をもつ。	●モデルを提示し、児童が触れて遊ぶようにして、児童の先行経験と秋のおもちゃづくりを結び付けて考えられるように言葉かけをする。…(研究の見通し1) ○次時は、秋の自然を利用して遊ぶものをつくることを予告し、活動への意欲をもてるようにする。
	3 4	○秋の自然物や身近にある物を使って、自分が遊んでみたいおもちゃを考える。	○秋の自然物と身近にある物を使って自分が遊んでみたいおもちゃを考えることを伝える。
		○モデルに触れて遊びながら、自分がつくってみたいおもちゃを考える。 ○おもちゃづくりへの意欲をもつ。	●モデルを提示し、児童が触れて遊ぶようにして、児童の先行経験と秋のおもちゃづくりを結び付けて考えられるように言葉かけをする。…(研究の見通し1) ●児童が、自分がつくって遊んでみたいおもちゃを「ふりかえりカード」に絵や言葉で表現するようにして、「学習スタート時の思いや願い」を記録として残しておけるようにする。(単元の終末で振り返りの手掛かりとして扱う)
見 通 し 2	は た ら き か け る	5 ○試行錯誤して、自分のつくりたいおもちゃづくりをすすめる。	●前時の児童の活動の見取りから、モデルを準備しておく。
		6 ○自分のおもちゃを楽しいものになるように工夫する。 ○材料の形や色などの組み合わせを工夫したり、特徴を生かしたりしながら、おもちゃづくりをすすめる。	●モデルを提示し、児童が見たり触れたりするようにして「対象」「利用の仕方」「他者とのかわり」「表現」の視点から、児童が自分のおもちゃの工夫を考えられるようにする。…(研究の見通し2) ●「ふりかえりカード」に本時の活動を絵や言葉で表現するようにして、児童が本時の学習のめあてを達成することができたか確認できるようにする。 【振り返りの視点】①「人とのかわり」②「できるようになったこと」③「工夫したこと」
	7 8 9	○友達と遊んで気付いたことを生かして、おもちゃづくりを発展させる。	●前時の児童の活動の見取りから、モデルを準備しておく。
		○グループの児童同士でおもちゃで遊び、楽しくなるよう工夫する。	○同じ種類のおもちゃをつくらせている児童同士でグループ編成をしておき、座席の移動をしておく。
		○みんなで一緒に楽しく遊べるように、遊びの約束やルールを考える。 ○自分のおもちゃを使って、友達と一緒に遊ぶ。 ○友達と一緒に遊んだ感想を伝え合う。	●モデルを提示し、児童が見たり触れたりするようにして「対象」「利用の仕方」「他者とのかわり」「表現」の視点から、児童が自分のおもちゃの工夫を考えられるようにする。…(研究の見通し2) ●「ふりかえりカード」に本時の活動を絵や言葉で表現するようにして、児童が本時の学習のめあてを達成することができたか確認できるようにする。 ○教室を時間内に回れるようにして、遊ぶ時間を十分に確保できるようにする。 ●友達のおもちゃで遊んだ感想や賞賛を言葉にして伝え合うようにする。(次時の振り返りの手掛かりとして扱う)
見 通 し 3	ふ り か え る	10 ○単元始めの自分と現在の自分を比べて、成長したことに気付く。 ○単元を振り返り、自分の成長を発表し合う。	●「学習スタート時の思いや願い」「成果物」「活動の発表における他者からの評価」を振り返りの手掛かりとして提示して、児童が単元始めから現在までの自分を振り返れるようにする。…(研究の見通し3) ●「人とのかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」の視点を問いかけて、児童が学習全体の具体的な自分の取組を振り返れるようにする。…(研究の見通し3) ●「ふりかえりカード」に文例を提示して、児童がこれまでの活動における自分を振り返り、言葉で表現できるようにする。

VI 研究の結果と考察

1 「であう」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、先行経験と対象とを結び付けて考えられるようにすることは、対象とかかわる意欲をもつ上で有効であったか。

(1) 全体の取組

「であう」過程では、児童の先行経験と秋のおもちゃづくりを結び付けて考えられるように、秋の自然物を使ったモデルを提示して活動を促す支援を行った。

「試す」ことができるモデルとして、ドングリごまとドングリやじろべえを提示した（資料1）。児童たちは、ドングリごまを回したり、ドングリやじろべえを指先にのせたりして、夢中になって遊んでいた。そこで、「みなさんの中には、ドングリ遊び名人がいるんですね。これから学習する『あきのおもちゃだいしゅうごう』では、みなさんのこれまでの遊びを生かして、楽しい活動ができそうですね」と投げかけ、児童の先行経験と秋のおもちゃづくりを結び付けて考えられるようにした。モデルで遊ぶ中で、「ドングリごま大会をしたい」「ドングリごまのステージをつくりたい」などと、秋のおもちゃづくりに意欲をもつ児童が見られた。

「比べる」ことができるモデルとして、二種類の葉を児童に提示した（資料2）。葉のモデルを提示して、「この大きい葉っぱと小さい葉っぱはどんな遊びができるかな。比べて遊びを考えてみましょう」と、児童の先行経験と秋のおもちゃづくりとを結び付けて考えられるように言葉かけをした。大きな葉に触れていた児童は顔に当てて、「お面になったよ」と言って、友達を驚かせて遊ぶようになった。赤く紅葉した葉に触れていた児童は、落ち葉を集めて、魚の形にしたり花の形にしたりして遊ぶようになった。「いろいろな形や色の葉っぱを集めて遊びたいな」とおもちゃづくりへの意欲をもつようになった。

「たとえる」ことができるモデルとして、竹とんぼにたとえることができるメヒシバを児童に提示した。メヒシバの茎を両手でこすると竹とんぼのように飛ばすことができる。メヒシバのモデルを提示して、茎を両手でこすって飛ばして見せ、何にたとえることができるか児童に問いかけると、児童は、「竹とんぼみたい!」と言って興味を示し、飛ばして遊び始めた（資料3）。そして、「どっちがうまく飛ばせるか競争しよう」と言って活発に遊ぶようになった。

資料1 「試す」モデル



資料2 「比べる」モデル



資料3 「たとえる」モデル



(2) 抽出児童の取組

抽出児童A（以下A児と記載）は、幼稚園のときにドングリごまを回るのが上手だったことを話しながら、夢中でドングリごまのモデルで遊んでいた。教師が、「Aさんは、幼稚園のときにドングリごまを回すのが上手だったんですね。これからドングリでどんなおもちゃをつくりたいですか」と言葉かけをすると、空き箱や紙コップとドングリを組み合わせたおもちゃを考え始めた（資料4）。

材料コーナーに行き、何度も繰り返しドングリごまのモデルを回したり、自分がつくりたいおもちゃの材料になりそうなドングリを選んだりして、おもちゃづくりへの意欲を見せた。

これらのことから、モデルを提示し、先行経験と対象とを結び付けて考えられるようにすることは、対象とかかわる意欲をもつ上で有効であったといえる。

資料4 遊びを考えるA児



2 「はたらきかける」過程において、「試す」「比べる」「たとえる」ことができるモデルを提示し、「対象」「利用の仕方」「他者とのかかわり」「表現」の視点から工夫を考えられるようにすることは、対象や人とのかかわりを深め、活動の充実感を味わう上で有効であったか。

(1) 全体の取組

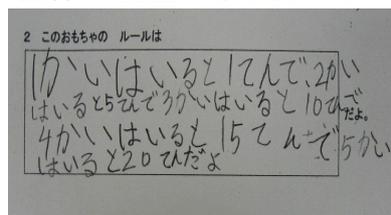
「はたらきかける」過程では、これまでの児童の活動の様子を見取り、児童がおもちゃの工夫を考慮することができるように、モデルを準備して提示した。児童は、一人一人が自分がつくりたいおもちゃを考えてつくるようになった。

まず、「比べる」ことができるモデルを提示し、「利用の仕方」の視点から工夫を考えられるようにした支援の例を挙げる。紙コップと麻ひもとマツボックリで、けん玉をつくっていた児童は、短時間で仕上げ、時間をもてあましていた。教師は、この児童は、「利用の仕方」の視点からの支援が必要であると見取り、「比べる」ことができるモデルを提示した（資料5）。長い牛乳パックと短い牛乳パック、半分に切った紙コップ、麻ひも、マツボックリをモデルとして提示し、「他の材料も使ってみると、いろいろなけん玉がくれそうですね」と言葉かけをした。この児童は、これらの材料を使って試行錯誤しながら難易度の異なるけん玉をつくるようになり、対象とのかかわりを深めるようになった。この児童は、遊びに来た友達と一緒に遊んでいるうちに、遊ぶ時のルールを考えることができるようになった（資料6）。このように、友達と楽しく遊ぶ中で、人とのかかわりを深めるようになり、活動の充実感を味わうことができるようになった（資料7）。

資料5 「比べる」モデル



資料6 児童が考えたルール



資料7 楽しく遊ぶ児童



次に、「たとえる」ことができるモデルを提示し、「他者とのかかわり」「表現」の視点から工夫を考えられるようにした支援例を以下に挙げる（資料8・9）。

資料8 「たとえる」モデルを提示し、「他者とのかかわり」の視点から工夫を考えられるようにした例

活動の様子	
見取り	魚の絵に落ち葉でヒレを付けていた児童と、箱に落ち葉を付けて海に見立てていた児童は、それぞれ一人で活動しており、遊びが発展していかなかった。この児童たちが対象や人とのかかわりを深め、活動の充実感を味わうことができるようにするためには、「他者とのかかわり」の視点から支援が必要であると見取った。そこで、「たとえる」ことができるモデルを提示して活動を促すことにした。
支援	「たとえる」ことができるモデルとして、魚釣りにたとえることができるモデルを提示した。そして、「他者とのかかわり」の視点から工夫を考えられるように、二人で一緒に遊ぶ中で、この児童たちの作品が、動きのある楽しい遊びに発展していくにはどうしたらよいか、二人に問いかけた。二人は遊びながら、魚釣りの遊びを協力してつくるようになった。海をつくっていた児童は釣り竿をつくるようになり、魚をつくっていた児童は、たくさん魚をつくるようになり、裏に点数を書くなどの工夫を加え、楽しい魚釣りの遊びを考えることができるようになった。他の児童も遊びに来て、魚釣りの遊びが楽しく盛り上がっていった。この魚釣りをつくった二人の児童は、自分たちがかかわりを深めたことで、遊びが楽しくなり、充実した思いをもてるようになった。



資料9 「たとえる」モデルを提示し、「表現」の視点から工夫を考えられるようにした例

活動の様子	
見取り	透明カップとドングリを使った作品をつくっていた児童は、自分の机の上に作品を置いたままで、遊びが発展していかなかった。活動の様子の観察から、この児童が対象や人のかかわりを深め、活動の充実感を味わうことができるようにするためには、「表現」の視点から支援が必要であると見取った。そこで、「たとえる」ことができる

り	モデルを提示して活動を促すことにした。
支援	<p>「たとえる」ことができるモデルとして、マラカスにたとえることができるモデルを提示して、「表現」の視点から工夫を考えられるようにした。この児童に、このおもちゃを何にたとえることができるか問いかけ、このモデルをヒントにして、自分がつくっているおもちゃの遊び方を友達に伝えるにはどうしたらよいか問いかけた。この児童は、モデルを手で振って遊ぶ中で、自分のおもちゃは、友達からは、遊び方が分からないのだということに気付くようになった。そこで、友達にも遊び方が分かるように、受け皿を付けたり遊び方をペンで書いたりした。この児童は、対象とのかかわりを深め、動きのあるおもちゃに改良することができた。友達とも遊びを楽しめるようになり、人とかかわりを深めるようになった。これらのことから、この児童は活動の充実感を味わうことができるようになった。</p>



(2) 抽出児童の取組

A児は、紙コップの縁に切れ込みを入れて輪ゴムを張り、その上にドングリをのせる作品をつくった(資料10)。遊びが発展していかないため、輪ゴムや木の実の特徴を生かせるような「対象」の視点から支援が必要であると見取った。そこで、「試す」ことができるモデルを提示して活動を促すことにした(資料11)。モデルを提示し、「ゴムのかけ方が似ていて、ひもが付いていますね。Aさんのおもちゃのヒントになりそうですね」と言葉かけをした。A児は、モデルで繰り返し遊ぶ中で、「ゴムは引っ張ると伸びる」という特徴や「ドングリは弾の代わりになる」ことに気付き、対象とのかかわりを深めるようになった。そして、はじめの作品をドングリ鉄砲に改造し、友達と競争して楽しく遊び、人とかかわりを深めるようになった(資料12)。

資料10 はじめの作品



資料11 「試す」モデル



資料12 工夫した作品



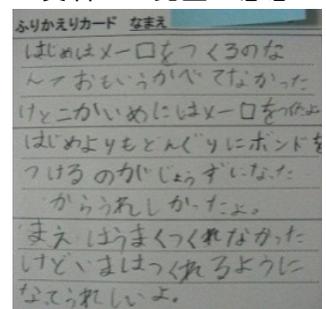
これらのことから、モデルを提示し、「対象」「利用の仕方の工夫」「他者とかかわり」「表現」の視点から工夫を考えられるようにすることは、対象や人とかかわりを深め、活動の充実感を味わう上で有効であったといえる。

3 「ふりかえる」過程において、「学習スタート時の思いや願い」「成果物」「活動の発表における他者からの評価」を振り返りの手掛かりとして提示し、「人とかかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」の視点から学習全体を振り返れるようにすることは、自分の取組の達成感を味わう上で有効であった。

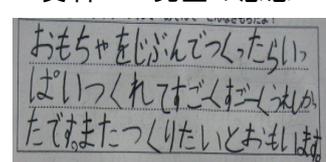
(1) 全体の取組

「ふりかえる過程」では、学習全体を振り返れるように、振り返りの手掛かりとして、「学習スタート時の思いや願い(第4時にかいた『ふりかえりカード』)」「成果物(これまでにつくったおもちゃ)」を提示するとともに、一緒に遊んだ友達からの感想や賞賛の言葉を伝え合うようにした。振り返りの手掛かりを児童に提示し、振り返りの視点を問いかけた。「人とかかわり」では、児童と一緒に遊んだ友達の名前を挙げられるようにして、その友達と一緒にやったことや、教え合ったことを挙げられるようにした。「できるようになったこと」「工夫したこと」は、児童のおもちゃを手掛かりにして、具体的な箇所について、児童が具体的に振り返ることができるようにした。すると児童は、「ボンドをつけるのがじょうずになったこと」などを、言葉で表現できるようになった(資料13)。また、ある児童は、「すごーくうれしかったです。またつくりたいとおもいます」と、自分の成長を実感するようになった(資料14)。

資料13 児童の感想



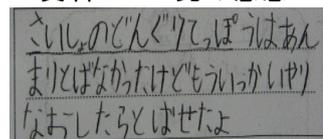
資料14 児童の感想



(2) 抽出児童の取組

A児は、振り返りの手掛かりの「学習スタート時の思いや願い」を見直しながら、単元始めの自分の取組を思い出していた。自分がつくったおもちゃを見ながら、「だんだんすごいおもちゃになったよ」と言っていた。一緒に遊んだ友達から「Aくんの鉄砲は面白かったね」「Aくんすごいね」という感想をもらっていた。

資料15 A児の感想



すごい鉄砲は面白かったね
だんだんすごいおもちゃになったよ

「人とのかかわり」について問いかけると、一緒に遊んだ友達の名前を挙げ、教えてもらって嬉しかったと振り返ることができた。振り返りの手掛かりのおもちゃを見ながら、「できるようになったこと」「工夫したこと」を問いかけると、がんばったことや、うまく飛ばせるようになった工夫について、嬉しそうに話をするようになり、「ふりかえりカード」に、言葉を使って表現した(資料15)。

これらのことから、「学習スタート時の思いや願い」「成果物」「活動の発表における他者からの評価」を振り返りの手掛かりとして提示し、「人とのかかわり」「できるようになったこと」「工夫したこと」の視点から学習全体を振り返れるようにすることは、自分の取組の達成感を味わう上で有効であったといえる。

以上のことから、単元において、対象とかかわる意欲をもてるようにし、活動の充実感、自分の取組の達成感を味わえるようにしたことにより、単元の終末で、自分の成長を実感する児童を育てることができたといえる。

VII 研究のまとめ

1 成果

- 「である」過程で、モデルを提示して、先行経験を想起して対象と結び付けられるように支援をしたことで、児童は対象とかかわる意欲をもつことができた。
- 「はたらきかける」過程で、モデルを提示して、四つの視点から工夫を考えられるように支援をしたことで、児童は対象や人と深くかかわることができるようになり、活動の充実感を味わうことができた。
- 「ふりかえる」過程で、単元の学習を振り返るための具体的な手掛かりを提示し、振り返る視点を問いかけたことで、児童は単元の学習全体における自分自身の具体的な姿を振り返ることができるようになり、自分の取組の達成感を味わうことができた。
- 本研究において、単元の過程ごとに手だてを取り入れて、対象とかかわる意欲をもてるようにし、活動の充実感、自分の取組の達成感を味わえるようにしたこと、自分の変容を喜び、自分の変容を前向きに受け止め、自分の成長を実感する児童を育てることができたといえる。

2 課題

- 「モデルを提示する時機と内容」と「振り返りの視点の問いかけ方」について、さらに研究を積んでいきたい。

<参考文献>

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領解説 生活編』 日本文教出版株式会社 (2008)
- ・嶋野 道弘 寺尾 慎一 編著 『生活科の授業方法』 ぎょうせい (2010)